

2022年5月1日(日) 主日朝礼拝説教

『すると二人の目が開け』 井上隆晶牧師
エフェソ1章17～19節、ルカ24章13～35節

①【イエス様の聖書解釈～聖霊による聖書解釈】

イエス様が復活した日曜日に、クレオパとルカという二人の弟子がエルサレムを後にして、エマオという村に向かって旅をしていました。エマオはエルサレムから西へ約11キロ離れた村です。そこへイエス様が旅人の姿で近寄ってきて彼らと一緒に歩き始めたのですが、彼らの目は遮られていてイエス様だとは分かりませんでした。イエス様が「歩きながらやり取りしているその話は何のことですか」と聞くと、二人は暗い顔をして立ち止まり、イエス様が殺されてしまったこと、三日目に墓に遺体がなかったこと、天使が現れ「イエス様は生きている」と言ったことなどを話しました。イエス様が復活したのに、イエス様が横にいるのに暗い顔をしているのは、神の言葉の意味が分からず、神がなさったすばらしい出来事が自分とつながっていないからではないでしょうか。

そこでイエス様は弟子たちに「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか」といわれ、「モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、ご自分について書かれていることを説明され」(25～27節)しました。「モーセとすべての預言者から初めて聖書全体」というのは、旧約聖書のことです。つまり旧約聖書全体からメシアは苦しみを受けて栄光に入るということを説明されたのです。イエス様の説教です。この説教を聞いて彼らは「心が燃えた」(ルカ24:32)といえます。この話を読みながら思いました。結局、イエス様に教えてもらわなければ人間は聖書を理解することはできないという事なのだと思います。詩編71:17に「神よ、私の若い時から、あなたご自身が常に教えて下さるので、今に至るまで私は驚くべき御業を語り伝えて来ました。」と書いてある通り、神ご自身によって人は教えられますのです。神から出たものは人間には理解できず、神でなければ解き明かすことはできないのです。

イエス様がエルサレムの祭りで語ると、人々は「この人は学問をしたわけでもないのに、どうして聖書をこんなによく知っているのだろう」(ヨハネ7:10)と言ったといえます。学問では聖書は分かりません。神によって教えられる必要があります。つまり祈りながらでなければ聖書は分からないのです。祈りは神に聞くことです。ここに現代の神学校教育の問題があります。学問で知ろうとして反対に聖書を信じられなくなった人たちを何人も見てきました。

ではエマオの旅人はイエス様に教えてもらったからいいけれど、現代の私たちはどうしたら良いのでしょうか。イエス様に代わって一体だれが聖書を解き明かしてくれるのでしょうか。答えは聖霊です。イエス様は聖霊について「真理の霊

が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。」(ヨハネ 16 : 13) と
言われました。イエス様はご自分に代わる者として聖霊を遣わされたのです。聖
霊が聖書の意味を教えてくれるのです。だから聖書を読む前に、聖霊を呼ぶ祈り
をしますのです。「天の王、慰める者、真理の霊…」 礼拝堂で聖書を朗読する時、聖
霊が私に語りかけます。するとひらめくのです。

使徒言行録の中にエチオピアの宦官がエルサレムに巡礼に行った時の話が出てき
ます。彼は馬車に乗ってイザヤ書を朗読していました。聖書を朗読しているの
ですから信者です。でも彼はその聖書の意味が分からず、喜びがありませんでした。
聖霊はフィリポに「追いかけてあの馬車と一緒に行け」と命じます。フィリポは
言われた通りに走り寄り、宦官に向かって「読んでいることがお分かりになりま
すか」(使徒 8 : 30) と聞くと、宦官は「手引きしてくれる人がいなければ、どう
して分かりましょう」と言います。そこでフィリポはそこからイエス様について
福音を告げ知らせます。宦官はフィリポから洗礼を受け、喜びに溢れて旅を続け
たと書かれています。フィリポは信仰と聖霊に満たされた人でした。(使徒 6 : 5)
聖霊によってでなければ、又は聖霊を持っている人でなければ聖書は解釈できな
いのです。聖霊の働きで聖書が分かった時、私たちも喜びを感じるのです。

②【聖餐によって目が開く】

やがて彼らは目的の村につきますが、イエス様は「先へ行こうとされる様子だっ
た」(ルカ 24 : 28) と書かれています。そこで二人は「一緒にお泊りください。
そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」(29 節) といって無理
に引き止めました。ここには「一緒に」「共に」「泊まる」という言葉が繰り返さ
れています。イエス様は、ある所まで来ると、あなたの意志を求められます。あ
なたが「共にいてほしい」と願えば共にいてくださいますが、あなたが求めなけ
れば先に歩いて行ってしまいます。救いは、本人が「欲しい」と思わなければ手
に入りません。

「一緒に食事の席に着いた時、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを
裂いてお渡しになった。すると二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿
は見えなくなった。」(30~31 節) とあります。「パンを取り」「賛美の祈りを唱え
「裂き」「渡す」この四つの動作は聖餐式と同じです。聖書の解き明かしでは、心
は燃えましたが、弟子たちの目は開きませんでした。しかし聖餐式で彼らの目は
開きました。これは嘘ではありません。私はいつも聖餐式で聖パンと聖ぶどう酒
をいただいた後に、その日の説教で一番言いたかったことが分かります。説教だ
けでは半分です。聖餐式があって完成します。なぜでしょう。それは体験をする
からです。パンとぶどう酒が体の中に入って私と一体になるので「私の中に
キリストがおられる」と感じます。つまり主が共におられることが分かります。
すると平安になり勇気が出て来て怖くなくなるのです。このキリストとの一体感、
一体となる経験が必要なのです。体験ほど強いものではありません。こんなことは

当たり前です。TVで「ザワつく！金曜日」という番組をやっています。高嶋ちさとさん、長嶋一茂さん、石原良純さんが出ています。一番食べたいものを当てる、というコーナーでおいしそうな物が出てきます。いつもそれを見ながら、いいなあ一度食べてみたいなあと思いますが、いつも番組が終わると忘れてしまいます。実際に食べなければおいしさなんてものは分かりません。絵に描いた餅は、綺麗だと感動しますが、力になりません。信仰もそれと同じです。勉強会で学ぶだけでは駄目です。体験が必要です。それは祈祷と礼拝の生活です。神の言葉に従う生活です。キリストと共に生きる生活です。それがなければ何の力にもなりません。

●赤木善光という東京神学大学で教会史を教えていた先生がいました。彼は教会の礼拝についてこんなことを書いています。「私たちはやはり礼拝時にキリストがその全能の力をもって体をもって会堂に満ちていたもうことを堅く信じるべきです。もしそうでないなら、私たちは聖日の朝、わざわざ肉体を教会堂に運んできて礼拝に出席する必要はなく、自宅でラジオの宗教放送を聞くなり、机の上で説教書を読んでいればよいということになります。…教会の礼拝は決して牧師の説教を聞くために来るところではありません。むしろキリストを体験するために来るところです。…キリストの体にあずかる経験、または自分がキリストの肢体であることの経験という意味です。」これは分かると思います。ここに来ると何かが違うのです。目が覚め、何かがおられるのはよく分かります。さらに聖餐について「われわれは聖餐によって天上に引き上げられ、キリストご自身と神秘的に合体するのです。…近代プロテスタントは聖餐において我々はキリストご自身にあずかるのだという最も大切な事が見失われ、キリストの救いの結果にのみにあずかるかのような誤解が生まれています。」とっています。

彼らの目が開くと、イエス様の姿は見えなくなりました。見えなくなったということは「見えなくても良い」ということです。イエス様というお方は、彼らが勝手に操作できない方であることを示すと共に、彼らの体の中にイエス様が入り彼らと一体になったので、見えなくなったのだと思います。彼らはすぐにエルサレムに引き返します。つまり神の都へとUターンします。それは彼らが再び信仰の旅を始めたことを現しています。説教と聖餐という礼拝には人生をUターンさせる力があります。地へ落ちてゆく私たちを、天へ引き上げる力があります。

人は土から造られましたが、同時に神の息を吹き入れられた者でもあります。天と地の両方の性質を持つものです。天のもの、神のものが入らなければ私たちはただ土に戻るための人生になります。祈らなければ人は人になれません。キリストが共にいなければ復活できません。神的なものが入っているからこそ、私たちは一つになれるのです。「パンが一つだから私たちは大勢でも一つの体です」この教会が他の教会よりも一体感があるのは、天のものが入る機会が多いからです。私はそこに喜びを感じます。キリストの体にあずかり、ますます強くなりましょう。